

保育者の新しいノート (3)

S. K. 生

1

○道義のたいはい甚しい。敗戦の後に来るものとして、一番心配されたものが來た譯である。なんといふ汚ない世の中であらう。なんといふ物騒な世相であらう。禮儀作法の崩れなんかは、その上數でもないやうに、それが當りまへのやうに、氣にもかけられない。これも健康と失業とに基く生活不安定の結果だといへばそれまでだが、そして、おとなはこの亂雑の中に身を守つてゐればいゝと言ふよりほか仕方ないと假りにしても、なんとも恐ろしく憂慮されることとは、その影響といふよりも、直接の見をつけが、子ども達の心を悪化してゆくことである。それが先づ青年、次に少年、今ではもう幼児にまで及んでゐる。

○幼児達の話を聞いてみて、びっくりさせられる言葉が少なくない。その汚穢さの意味が深く分つてゐるのではなからうとしても、子らのもつ数少ない語彙の中に、こんな言葉が毫高に語られてゐるのは、なんとしたことか。更にそれらが遊びの中に取り入れられてゐるのを見ると、全く目を覆ひたくなる。眞似といふものの、興味として行はれてゐるのである以上、全く以て飛んでもないことである。闇屋ごつこ、とみ箋ごつこ、あゝ何んたることか、強盗ごつこ、誘かいごつこ、地獄だつてこんなことは見られまい。

○からうなつては、これが世相だ、子どもは模倣性に富むものだ、では決して済まさ

れない。どうしたらよからう。いふまでもなく、聞き捨てにせず、見のがすことなく、しつかりと禁止することだ。言葉も強く、目色も厳しく、しつかりと禁止することだ。その時の先生の目の中に、ちらりと涙の光りが見えたら尚ほ力があるであらう。

○しかし、すべての教育における如く、禁止だけで終るものではない。いゝ言葉、いゝ遊びを、どしどし與へなければならぬ。

2

○心のよごれと共に、子ども達のからだも汚れやすい此頃だ。洗つてやらう。必ずしも入浴ではない。額を、口を、目を、殊に手はよく洗はせたい。幼稚園に來た時、歸る前、わけてもお弁當の前は必ず。訓練といふよりも、衛生の實際の必要のためには。

3

○きたない町、きたない電車、多分きたない自分の家、そこで幼稚園はせめて清潔に、整頓に、掃除をよくゆき届かせよう。それも子どものゐる間、ちらかつてゐるのはいゝとして、朝、子どもが來る朝、子どもの心持ちに影響する位きちんと、さつぱりと、ほこりのない入口、廊下、部屋々々、庭、殊によく氣をつけたい便所。

○世の中は如何に亂れようと、世相は如何に荒びようと、われらの幼稚園だけは守らう。きれいな世界、品位のある世界として。